

山住正己の教育学理論の形成過程(その1)

「戦後教育学」再検討の一つの試み

草野滋之 *KUSANO Shigeyuki*

- 1 — 「戦後教育学」をめぐる議論の動向と課題
 - 2 — 東大音感合唱研究会・うたごえ運動との出会い
 - 3 — 生活記録運動・青年運動・宮原ゼミナールへの参加と影響
 - 4 — 芸術教育運動・民間教育研究運動への参加とそこから学んだもの
 - 5 — 勝田守一との出会いと影響
- おわりに— 「文化と教育をつなぐ」という教育理念

【要旨】「戦後教育学」の成果・遺産をどう評価していくかという課題は、20世紀末～現在にかけての、教育学界における重要な論争的テーマの一つとなっている。山住正己(1931～2003)は、新制大学の教育学部1期生であり、『唱歌教育の成立過程の研究』により教育学博士第1号となった。また、教育科学研究会をはじめとする民間教育研究運動に深く関与しながら、教育学研究者としての生涯を歩んできた「戦後教育学」を代表する人物の一人である。本稿では、東京都立大学の停年退職時の最終講義のタイトルにもなった「文化と教育をつなぐ」という、山住教育学の中心的理念がどのように形成されたかを、1950年代後半～1960年代初頭の時期にしぼって検証した。とりわけ、山住の自己形成と教育的な関心の形成に重要な影響を与えた、東大音感合唱研究会とうたごえ運動、当時の生活記録運動や民間芸術教育運動、さらには園部三郎や勝田守一等の人物との出会いにも注目して検討した。

1 — 「戦後教育学」をめぐる議論の動向と課題

(1) 「戦後教育学」をめぐる議論の動向

「戦後教育学」をめぐる議論が、教育学研究者のあいだで高まり始めたのは、「戦後50年」という歴史の節目を迎えようとする1990年代前半の頃からである。たとえば、日本教育学会においては、1993年～95年の3年間にわたり、課題研究のテーマとして「戦後教育学の再検討」が掲げられて、活発な議論がかわされている。そこにおける議論の内容は多岐にわたるが、基本的に確認されたことは、「戦後教育学」の本格的な発展は1950年代以降であり、戦後教育改革の理念や価値を発展させようとする教師の自主的な民間教育研究運動と結びつきながら、「現実・実践から教育の理論化をおしすすめていった事実の中にこそ『戦後教育学』の本格的な展開を見ることができた」ということである¹⁾。また、1993年の課題研究のシンポジストの一人である斎藤浩志は、「戦後教育学の原点」として、日本国憲法と教育基本法の原理をあげるとともに、「『教育的価値』追求の学としての教育学研究の自

覚化」を「戦後教育学のきわめて重要な一里程碑」であったと述べている²⁾。斎藤は、本稿でとりあげる山住正己とともに、新設された東京大学教育学部・大学院の1期生であり、これは、多感な青年期を戦後教育改革の中ですごした世代の実感から把握された「戦後教育学」のとらえかたであるといえよう。

この課題研究の目的は、「戦後教育学の全体構造を明らかにし、その持っていた意味（特長・成果ばかりでなく、弱点、錯誤、誤りなども含めて）を解明すること」³⁾であり、「戦後50年」の歳月の経過をへて、急速に変化する時代における新たな教育学構想を描くうえで、貴重な意味をもっていた。しかし、このテーマは、その後、アカデミズムの世界では十分に深められてきたとはいえない。その一方で、現実の世界においては、戦後の教育や教育学の成果・遺産が顧みられることなく、性急なかたちでの政府主導の「教育改革」が進められ、斎藤が「戦後教育学の原点」として高く評価した教育基本法（1947年）も2006年に「改正」された。また、このような上からの「教育改革」に対して批判的な立場にあるリベラルな教育学者の側でも、近年、「戦後教育学」に対する批判・否定的な評価が下される傾向が出てきた⁴⁾。そして、このような批判に対しては、「戦後教育学」を第一線でリードしてきた当事者による反論⁵⁾、さらには、「戦後教育学」の意義と成果を積極的に継承する立場からの反批判⁶⁾が展開されるなど、「戦後教育学」をいかに評価するかをめぐっての論争的な状況が、現在も続いている。

このような状況において、今日あらためて「戦後教育学」についての実証的な考察をふまえた検討が求められているといえよう。本稿は、こうした課題を意識しつつ、「戦後教育学」の重要な担い手の一人であった山住正己（1931～2003）の教育学理論に注目し、その理論の特質と、現代に継承していくべき遺産を検証していくことを課題としている。山住は、戦後に新設された東京大学教育学部・大学院の第1期生であり、教育学博士の第1号でもある。そして、教育科学研究会や日本教職員組合の教育研究運動をはじめとする民間教育研究運動に一貫して深く関与し、家永教科書訴訟や「日の丸・君が代」問題への積極的な関わりにみられるように、リベラルな思想を軸にして、国家の教育政策を厳しく批判し対峙する姿勢を生涯にわたって貫いてきた。その意味では、まさに、「戦後教育学」を体現するような代表的な教育学者であったといえる。

山住の教育学理論については、2003年2月の没後に新聞・雑誌等に掲載された追悼文⁷⁾、そして、大学院で山住の教えを受け、教育学研究への道を進んだ弟子たちによる研究論文が散見される程度であり、本格的な研究は今後の課題として残されている⁸⁾。また、最近の音楽文化史研究において、山住の唱歌教育史研究の業績が基本文献として言及されていることも注目される⁹⁾。教育学理論研究、音楽文化史研究など複数の視点から、山住の生涯とその業績が検討されることが、今後求められている。

（2）本稿の課題

本稿においては、東京都立大学における最終講義のテーマともなった「文化と教育をつ

なく」¹⁰⁾という、山住の教育学研究の基本的枠組みが、どのように形成されたのかに注目したい。時期的には、彼が、東京大学教育学部の大学院に1期生として入学し、勝田守一、海後宗臣、宮原誠一、大田堯等の指導のもとで教育学研究の世界に入り、博士論文『唱歌教育成立過程の研究』を執筆し、それを基にした岩波新書『日本の子どもの歌』(1962年)を園部三郎との共著により刊行する、1950年代後半～60年代初頭の時期を中心に、彼の理論活動の足跡をたどっていきたい。具体的な検討課題は、次の三点である。

第1には、1950年代に高揚した、うたごえ運動や生活記録運動をはじめとする民衆の自己教育運動や、教育科学学会の運動、日本教職員組合の教育研究集会、音楽・演劇・美術等の民間の芸術教育運動に出会い、積極的に参加していくことを通じて、山住の教育学理論の骨格がどのように形成されたかを明らかにしていくことである。晩年に刊行された、これまでに山住が執筆して雑誌等に掲載された追悼文(全部で64名)を収録した『點鬼簿—先達を偲び、先達に学ぶ—』(国土社、2001年)の内容の大半が、こうした運動の中で親交を結ぶとともに、深い影響を与えてくれた人物に対する追憶の文章で占められていることから、これらの運動との出会いと経験が、山住の教育学理論の基盤を形成していったと考えられる。

第2には、博士論文『唱歌教育成立過程の研究』に結実し、その後における教育内容研究の基本的性格を規定することになった、山住の音楽教育史研究、そして、その教育史的知見に基づいて展開された音楽教育研究の軌跡と性格を明らかにすることである。1966年に論文集『音楽と教育』(国土社)を刊行して以降は、音楽教育に関する山住の発言はしだいに少なくなり、研究と関心の重点は、教科書や教育課程、近世～近代にかけての教育史に移ってくる。しかし、先述した『點鬼簿』に収録された、梁田貞、園部三郎、小泉文夫、永田栄一、芥川也寸志、山村公治、井上頼豊、奈良清利等の音楽文化人、音楽教育研究者への追悼文は、とりわけ親しみと敬愛の情がこもったものであり、懐かしい過去の記憶とともに綴られている。また、還暦を過ぎてから、4冊目の岩波新書として『子どもの歌を語る—唱歌と童謡』(1994年)を刊行し、さらに、作曲家・柴田南雄の自伝『わが音楽わが人生』(1995年、岩波書店)や、チェリストであり、うたごえ運動の指導的な存在でもあった井上頼豊の自伝的な性格をもった本『聞き書き・井上頼豊—音楽・時代・ひと』(外山雄三・林光編、1996年、音楽之友社)について、長文の書評¹¹⁾を寄せていることから、日本の音楽文化や音楽教育の問題についての探究心は衰えることがなく、それは山住の生涯を通ずるものであったといえるのではないか。

第3には、「文化と教育をつなぐ」という山住の教育学理論の基本的な枠組みと、山住の教育学上の恩師であった勝田守一の教育学構想との関連である。勝田は、哲学者として学究生活を開始したが、戦後において文部省のなかで教育改革に深く関わり、1950年代以降、東大教育学部で、宮原誠一・宗像誠也等とともに、日本の民間教育研究運動に積極的に参加・協力しながら、新しい教育学の構築に向けての模索を重ねていた。山住は、勝田の影響を受けつつも、その枠にとどまらない独自の教育学の構想を生み出そうとしていた。そ

の根幹にあったのが、「文化と教育をつなぐ」という視点であり、それは後の、教育内容・教育課程研究、教科書問題への積極的な関与へとつながっていくものであった。ここでは、勝田の教育学構想から山住が何を学んだのか、そして、「文化と教育をつなぐ」という視点が、当時の日本の教育状況においてどのような意義をもっていたのか、を考察していきたい。

2——東大音感合唱研究会・うたごえ運動との出会い

（1）東大音感合唱研究会との出会いの意味

山住が、新設された東大教育学部の大学院に進学した1953年は、うたごえ運動、生活記録運動などの、サークルを基盤とした民衆の文化運動や自己教育運動が急速に高揚してきた時期であった。戦後におけるうたごえ運動の始まりは、1948年に、青年共産同盟の運動の中から発足した、青共中央合唱団の活動にさかのぼることができる。それゆえに、当初は、政治運動や労働運動と結びつきながら歌を広めていくという、政治的な色彩の強いものであった。しかし、1950年代以降、サークル活動が大衆化していくなかで、平和運動とも結びつきながら、しだいに大衆的な合唱運動として発展していった。1953年には、全国各地の合唱サークルの発表と交流のイベントとして、第1回の「日本のうたごえ祭典」が開催され、山住が東大音感合唱研究会に参加する1954年には、「うたごえは平和の力」のスローガンを掲げて運動はピークを迎えようとする頃であった。

山住が、少年期・青年期をすごした1930年代後半～40年代は、戦争の影響と敗戦後の混乱した社会の中で、自由な音楽教育や音楽文化活動は抑圧され停滞した状況におかれていた。山住は、旧制中学時代に音楽教師であった梁田貞から受けた音楽教育の思い出を、繰り返し述べている。しかし、それは、多感な若者の音楽的感性を刺激し高めるものとはほど遠いものであり、かつて、同じ梁田に音楽を学んだ遠山啓や柴田南雄が綴っているような、イタリア歌曲や自作の「城ヶ島の雨」を自ら歌い、音楽の魅力を強烈に印象づけるような教育を受けることはできなかった¹²⁾。そして、戦争が終わってからの学生生活においても、山住が熱中していたのは野球であり、また、自己形成に大きな影響を与えたのは、彼の父親が戦争から帰ってきてきて閑職にあった時期に次々と買い込んできた「文学をはじめ古今東西の教養書」であった¹³⁾。後の音楽への深い関心へつながっていくような、青年期における体験は何も語られていない。こうした点からも、山住が音楽文化・音楽教育への飽くなき探究へと向かっていく原点として、東大音感合唱研究会とうたごえ運動との出会いがあったことがうかがえる。

では、山住が、東大音感合唱研究会の活動を通じて受けた影響とは、いったいどのようなものであったのだろうか。東大音感が発足したのは、戦後初期の頃であり、1949年前後から本格的な活動が始まっている。当初は、経済学者の内田義彦等がリーダー的な存在であり、ヨーロッパにおいて近代社会の成立とともに発展してきた和音による音楽を学ぶこ

とを通して、「近代」についてより深くとらえ直すということが、活動のねらいの一つであった¹⁴⁾。そして、1950年代に入り、うたごえ運動の影響もあり、しだいに社会的・政治的な問題との接点も広がり、創作・訳詞などの活動、読書会、子ども会、歌う会、人形劇、踊る会等の小グループ活動も盛んになり、合唱を中心とした総合的なサークル活動として発展していった。山住が入会した1954年は、東大音感の活動は、まさにピークを迎えていたようである¹⁵⁾。山住は、音感に入会した当時のことをふりかえりながら、次のように述べている¹⁶⁾。

修士課程2年目の春、友人に誘われるまま、東大音感合唱研究会トニカ合唱団に入った。大多数は学部の学生と他大学の女子学生だったから、大学院生である私は『遅れてきた青年』であった。しかしこのサークルへの参加は私に一つの転機をもたらした。この合唱団は、当時、職場や大学さらには農村の青年サークルにまで拡がり始めていた『うたごえ運動』につながるものであり、指揮者は私が入った頃、井上頼豊氏から関忠亮氏へ代わった。中略。夏の合宿、原水爆禁止運動への参加、ショスタコヴィッチ『森の歌』の合唱、加波山事件記念集会への参加等々、思い出すことに事欠かぬが、なかでも印象にのこるのは、54年の夏休みに慶応大学部落問題研究会の面々といっしょに信州の未解放部落へ出かけたときのことである。数日間、集会所に泊まり込み、慶大生は調査活動、こちらは文化活動を行ない、子どもたちと歩いて30分ほどのところにある名園へ出かけたり、村の青年たちと野球試合も行った（このとき私のことを、ボール投げなどできぬ男だろうと思っていたのに、ホームランまで打ったのに驚いた女子学生もいた）。動かないものが動き始め、黙っていたものがしゃべり始め、浅い考えしか持たなかった者が深く考え始めるようになるのを目の前に見て、というより自分自身がそのような方向に動き始めているのではないかと思い、サークル活動は青年にとって大きな意味のあることを知った。ここから、教育は学校のなかだけにあるのではなく、こういう活動を各地で展開することこそ教育だと思うようになった。

このように、音感は、合唱活動を中心としながらも、それにとどまらず広く社会・政治の問題にも視野を広げ、総合的なサークルとしての活動を活発に展開しており、それは山住自身の自己形成においても大きな意味をもっていた。また、音感の活動は、山住にとって、サークル活動の教育的意味の発見とともに、合唱や音楽の世界への扉を開くものであった。山住とほぼ同じ時期に入会した会員の「音感初体験」の強い印象として語られているのは、出会った歌の新鮮さであり、これまでに味わったことのない合唱の楽しさであった。たとえば、ある会員は次のように述べている¹⁷⁾。

音感に入って驚いたことがいくつかあります。まずは、歌の新鮮さですね。これは今も変わらない感情です。その時聴いた歌には良い意味で鳥肌が立った。それを朝から

晩まで感じるくらいすごかったですね。ロシア民謡、ソヴィエト歌曲などどちらもそれまで逢ったことのないものだった。世の中をどう変えるかということと全く別の次元の問題ですね。

また、幼少期からピアノや聴音・和音などの音感教育を受けるなど、豊かな音楽的環境に恵まれ、高い音楽的な要求をもっていた会員は、次のように述べている¹⁸⁾。

音楽や歌に高校の音楽の時間に歌っていた『流浪の民』なんかと全然違う新しさを感じたのですね。きれいごとではないし、作り物でもなく直接的に分かる、そういう歌をたくさん歌っているのが音感だ、私の求めていた歌だと思いましたね。

当時の音感で愛唱されていたのは、「トロイカ」「道」「アムール河の波」「赤いサラファン」をはじめとするロシア民謡・ソヴィエト歌曲、そして音感の指揮者を務めていた関忠亮作曲の「桑畑」「美しき祖国のために」等の曲であった¹⁹⁾。このような歌との出会いを通しての新鮮な音楽的感動と発見は、同世代の山住にとっても共通したものであったのではないか。

(2) うたごえ運動との出会いと音楽教育改革への志向の萌芽

東大音感・うたごえ運動との出会いは、その後の山住の教育学研究の方向性に決定的な影響を与えたと考えられる。合唱サークルの活動を契機として音楽教育の歴史的研究へと向かったことを、山住は次のように述べている²⁰⁾。

合唱サークルでは学校の教育で『音痴』と思い込まされた人たちが歌い始めるようになっていたし、教師のサークルでは文部省の決めた方式とは違う教育課程の編成を進めようとしていた。これらに参加しながら、問題の根源の解明が大事だと考え、まず音楽教育にとりくみ、その出発点である19世紀後半、明治10年代における唱歌教育の実態と問題点を明らかにしようと思った。これを博士論文として仕上げるにあたっては東京芸術大学音楽資料室の方々に大変お世話になり、この親切さは忘れられない。この方々を始め、多くの友人の協力によって58年12月、「わが国初等教育における唱歌教育成立過程にかんする研究」（後に『唱歌教育成立過程の研究』として東京大学出版会から刊行）を提出した。

このように、音楽教育の問題の根源を明治初期にさかのぼって歴史的に究明していく作業を進めながら、山住は、当時のうたごえ運動が日本の音楽文化や音楽教育のあり方を変えていく可能性を感じとり、音楽教育改革に向けての努力を始めていた。

山住が、音楽教育について初めて書いた文章には、うたごえ運動の発展との関連で音楽

教育の課題が論じられている²¹⁾。それは、「うたごえの発展によって、子どもの音楽上の環境をかえていくことができるのではないか」という視点、そして「学校の音楽教育は、この運動から学べるものがあるのではないか」という視点、以上の2つの点から論じられている。山住は、うたごえ運動について「この運動は、世界にもあまり例のないすぐれた音楽運動としてこれから、日本の国民音楽をつくりあげてゆく条件をととのえようとしている」と、その文化的意義を高く評価し、その結果として「音楽が、多くの人たちの生活のなかにまではいりこんでいきはじめています」と述べ、この運動が日本人と音楽の関係を大きく変えていく可能性を示唆している²²⁾。そして、学校の音楽教育が、合唱サークルの活動から学ぶべきものとして、「メンバーのうたいたいというそぼくな要求をみだし、自主的な発言や行動をさせるようにつとめ、そのなかで必要に応じて技術をとりあげていっている」ことをあげている。

当時の学校の音楽教育について、現場の教師のあいだで議論になっていたのは、子どもたちが好んで歌う流行歌とその背景にあるマスコミ文化の問題、そして、子どもたちを音楽から遠ざけてしまう要因となっている技術主義の問題であった。1947年の学習指導要領の制定は、戦前において長い間、道徳教育に従属していた音楽教育を解放して、「芸術教育としての音楽教育」が発展していく上で大きな意義をもっていた。しかし一方で、「日本の子どもたちの音楽的能力の発達のスジミちとは関係なしに、ともかく音楽上の技術を彼らに伝達すればよいという考えがひろがった結果」として、教育現場には技術偏重の風潮が広がり大きな問題となっていた²³⁾。山住が参加していた東大音感は、「音痴歓迎」というスローガンにもあらわれているように、音楽上の技術の問題以上に、歌いたいというメンバーの自主的な要求を大切に、意見を交わしあいながら曲創りを進めていく方針がとられていた。これは、うたごえ運動の影響を受けた合唱サークルの多くに共通するものであり、学校の音楽教育が直面していた技術主義の克服の方向性を、東大音感やうたごえ運動に関わることを通して、山住は実感的にとらえたのではないだろうか。

3——生活記録運動・青年運動・宮原ゼミナールへの参加と影響

(1) 宮原ゼミナールへの参加と生活記録運動との出会い

うたごえ運動とならぶ、1950年代に広がった民衆の自己教育運動のもう一つの流れとして生活記録運動があげられる。山住も、当時、この運動には強い関心をもっていたと思われる。1951年の『山びこ学校』（無着成恭編）の刊行により、戦後の生活綴り方運動の復興が始まるが、これは、青年・成人の学習運動にも強い影響を与え、サークル活動の中で生活記録を書く運動が広がっていった。とりわけ、『母の歴史』（木下順二・鶴見和子編）、『農村のサークル活動』（大田堯編）の刊行は、生活記録が社会的な注目を浴びる大きなきっかけとなり、青年・成人たちの学習運動としての生活記録の意義を論じる研究論文が出されはじめる。

山住も、同じ東大教育学部の大学院生との共同執筆により、生活記録学習や青年運動についての論稿をまとめている²⁴⁾。山住が、こうした活動に関心をもち、サークル活動の現場を訪ねながら、青年たちの自己形成のリアリティにふれるようになったきっかけは、大学院での宮原誠一のゼミナールへの参加であった。山住は、宮原への追悼文の中で、当時のゼミナールの思い出を次のように述べている²⁵⁾。

宮原誠一先生との出会いの場は学生時代のゼミであった。あれは私にとって大変なつかしい勉強の場である。都会で育ち戦時中も疎開をしないで東京に住んでいた私は農村をまるで知らず、大田堯先生のゼミでいきなり農村につれていかれて、ひどく戸惑った。中略。農村をもっと知りたいと思って、専攻学科の違う宮原ゼミに参加した。そこでは、群馬県佐波郡島村（現・境町）の全村教育なるものにとりこんでいた。私はそのなかで青年の生活記録サークルを担当した。先生からの細かい指示はほとんどなかったが、こういう活動のできるのが、まさに宮原ゼミであり、一月に二回は村へ出かけ、一晩青年たちと話しあって、翌朝帰るとい生活が始まった。私にとって大転換をもたらしたゼミである。

山住が初めて執筆した論文である「人間関係と道徳意識²⁶⁾」（日高六郎との共同執筆）は、このような生活記録のサークルへの参加の経験がもとになっている。この論文のねらいは、「自分の住む部落だとか、職場、あるいは、グループとかサークルといわれる自発的な集団など、人々にとって、ごく身近な場面」において、「ほかの人たちと互にふれあい、関係し合うなかから生まれてくる道徳を追究したい」というものである。敗戦から10年を経た1950年代半ばの日本社会において、様々な制度改革により、戦後の民主主義理念がしだいに浸透してきた一方で、古い封建的な習慣や意識も根強く残存していた。戦後改革を経て高度経済成長へと向かおうとする、当時の日本社会においては、いわば、新しく生まれ出ようとする道徳と、それを阻む旧来の古い道徳がせめぎ合っている状況にあった。生活記録は、そのような、人々をとりまく人間関係や意識の軋轢を、生の具体的な問題を通して表現しようとするものであり、新しい道徳意識が生まれてくるリアリティを感じとれるものであった。

（2）芸術文化活動と青年の自己形成の関連への注目

しかし、山住が執筆に関わった生活記録や青年運動について書かれた論文は、いずれも「東京大学農村サークル研究会」の名称であり、同じ大学院生であった木下春雄・斎藤浩志との共同執筆によるものであった。また、後に、勝田守一編『教育学論集』（大学セミナー双書、河出書房新社）に収録されることになった論文「青年の生活記録学習を検討する」（木下春雄との共同執筆、『教育』1957年12月号）についても、「連名になっているが、あれは大半が木下君の文章であり、彼の業績である」と述懐している²⁷⁾ように、生活記録や青年サー

クル運動の問題には強い関心を持ちながらも、それを本格的に自らの研究テーマとして追究することへは至らなかった。

山住が最も関心を持っていたのは、やはり、音楽を中心とした芸術・文化活動の問題であり、青年のサークル運動についても、このような視点からのアプローチを試みていた。たとえば、1957年の第3回全国青年研究集会における討論の内容と、青年運動の現場の問題点をまとめた共同論文²⁸⁾において、山住は、集会の第三部門「青年のくらしと学習活動」の第二分科会「仲間づくりとしての演劇・映画・コーラス活動」の議論のまとめと分析を担当している。この中で、山住は、分科会における議論の内容が、仲間づくりとの関係だけで芸術文化活動の意義が論じられていることに対して疑問を提示し、「仲間づくりの手段としてだけ」ではなく、青年たちが合唱・演劇等の活動を行うことが、「芸術を自分らの手にとりもどすという点で大きな意味をもって」おり、「芸術を本来の姿にかえすきっかけとなっている」と述べている。これは、青年たちの芸術文化活動そのものに内在する独自の価値を認め、その活動が、青年たちの自己形成にとどまらず、社会における芸術文化本来の姿を回復していく原点として重要な意義をもっていることを指摘したものである。このような視点や感覚の土台には、山住が、東大音感・うたごえ運動の活動を通じて実感し形成してきた、音楽文化と人間形成の関係把握、国民的な音楽文化創造の理念があったと考えられる。

山住が着目した、仲間づくりの手段にとどまらない、青年・成人の芸術文化活動の独自の教育的意義や、国民文化創造の基盤としての意義についての検討は、当時の社会教育・青年期教育研究の中では、十分に理論的に深められることがなかった。また、山住自身も、その後、自らの研究の足場を、学校の音楽教育を中心とした教育内容研究、子どもの芸術教育の領域に限定するようになり、この問題についての、社会教育的な視点からの追究は空白の状態となり、それ以降の研究課題として残されてしまった²⁹⁾。

4 — 芸術教育運動・民間教育研究運動への参加とそこから学んだもの

(1) 民間芸術教育運動の発展

山住が、1950年代のサークル活動や青年の学習運動に強い関心をもちつつも、自らの研究領域を、学校の音楽教育や子どもの芸術教育の問題にしぼり、本格的な探究を始めるのは1957年からである。その背景には、戦後の民間教育研究運動の発展の中で、立ち遅れていた芸術教育の運動が新たな飛躍の時を迎えていたことがある。ここで、戦後初期から1950年代半ばまでの、民間の芸術教育運動の動きを簡単にふりかえっておきたい。

芸術教育の中でも、比較的早い時期から民間教育運動が発展していたのは、美術・演劇の領域であり、音楽は一步遅れた動きをしていた。1947年の「学習指導要領」において、道徳教育・情操教育の手段とされていた戦前の音楽教育の在り方が批判され、音楽教育を芸術教育として発展させていくみちすじが示された。しかし、子どもをとりまく音楽的な

環境は貧しいものであり、音楽教育を担う教師たちの実践も十分な成果があがっていないとはいえない状況にあった。1951年に始まった日教組の全国教育研究集会の分科会において、音楽教育の問題がとりあげられるようになったのは、1955年の第4次研究集会からであり、そこでは、子どもたちが好んで歌っている流行歌の問題、またそれに影響を与えているマスコミの問題が中心にとりあげられ議論されていた。「マスコミがまるで子どものしんまで腐らせるように浸透している」状況に対して、「そんなものにまけないよい歌を、子どもが喜ぶ歌を与えなければならない」ということが、音楽教育の課題として出されていた³⁰⁾。

音楽教育の運動が大きく発展していくきっかけとなったのは、1957年8月に開かれた、第1回芸術教育全国連合研究集会である。この集会は、「芸術教育をみんなのものにするために」というスローガンのもとに、数年前からそれぞれの独自の領域で研究活動を進めていた演劇教育・美術教育の団体が中心となり、音楽教育関係の人々にも働きかけて開催したものである³¹⁾。この集会をきっかけにして、音楽教育の領域における研究運動を推進する団体として「音楽教育の会」が発足する。そして、この「音楽教育の会」は、同年の秋に第2回研究大会を開き、さらに翌年の夏に、第3回全国研究大会を開催する。その大会には、日教組の教研全国集会に参加していた音楽教育関係者の人々が結集していた「日本音楽創育の会」（1956年8月結成）も合流して、それ以後、この2つの団体が合同して「音楽教育の会」として新しく歩み始める。山住は、東大音感・うたごえ運動との出会いを通して、日本の音楽文化の在り方や音楽教育の問題への関心を深めていったが、このような音楽教育の領域における民間教育運動の発展が、彼が自らの研究課題を学校の音楽教育に焦点化していく一つの重要な背景としてあったのではないだろうか。

（2）園部三郎との出会い

そして、その当時、日教組の教研集会の講師を務め、「音楽教育の会」結成の中心メンバーの一人でもあった音楽評論家・園部三郎との出会いも、山住の研究を方向付けていく上で大きな影響力をもったと考えられる。園部は、戦前から、山根銀二とならんで進歩的な音楽評論家として活躍しており、戦後には、新たな民主化の時代を迎えて盛り上がりを見せていた民衆の音楽文化運動に深い思いを寄せて、日本の民衆音楽の歴史や音楽教育の問題についても、旺盛な研究と発言・行動を展開していた。山住は、園部との出会いについて、次のように回想している³²⁾。

一番最初にお目にかかったのは、1957年の春だったと思います。その前年あたりから、美術教育、演劇教育、文学教育など、芸術教育関係のさまざまな分野の人たちが集まって日本の芸術教育を何とかしなければいけないと考えて、その合同の研究集会を開こうとしました。そのときに、残念なことに音楽教育だけにはこれらの団体と並ぶ民間の研究団体がなかったのです。中略。そのとき、音楽教育の方で中心になって動いてくださったのが園部さんでした。こうして1957年の夏に各分野の人たちと一緒に

に早稲田大学を会場にして合同の研究集会を開き、同時に音楽教育の会という団体を発足させました。

山住と園部は、この出会い以来、音楽教育の研究とその改革に共同して力を尽くし、1962年には『日本の子どもの歌』（岩波新書）を共著として刊行するに至る。その「あとがき」には、「この本は、音楽畑の園部三郎と教育畑の山住正己とが、意見を交換しながら書き上げたものであるが、日本の音楽教育の発展のためにこのような協同作業が、もっともとおこなわれることを望んでやまない」と述べられているように、1957年の出会いから5年にわたる音楽教育についての二人の交流・協力活動の結晶であり、教育以外の他の専門分野の文化人・知識人との交流・協力を何よりも大切にして貪欲に学ぼうとした、生涯を貫く山住の研究姿勢の原点を形づくるものでもあった³³⁾。また、山住は、戦後初期に園部が著した『民衆音楽論』（1948年）にふれながら、園部がなぜ音楽教育の問題にふみこんでいったのか、その動機について次のように述べている³⁴⁾。

遡ってみますと園部さんは、敗戦後早い時期に『民衆音楽論』という本を書いておられます。この本のもつ意味が大きかったのだと、このごろ気がつきました。その『民衆音楽論』から音楽教育へというのは真っすぐに続いている道ではないか。本当に民衆のための音楽文化のあり方を考え、音楽を本当に民衆のものにしていきたいというとき、どうしても民衆のための音楽教育活動のあり方について考えざるをえないので、園部さんは教育に足をふみ込まれたのではないかと考えます。

ここで、山住がとらえている『『民衆音楽論』から音楽教育へ』と至った園部の歩みは、まさに山住自身にもあてはまるものであったのではないだろうか。二人の音楽教育研究の根底には、日本人にとっての音楽の意味を問い、日本の民衆の音楽文化をどう創造し発展させていくか、という問題意識が常に息づいていたと考えられる。

5 — 勝田守一との出会いと影響

これまで述べてきた、音楽教育をはじめとする民間の芸術教育運動とともに、1950年代後半の山住の教育学理論の形成において大きな影響を与えたのは、日教組の全国教育研究集会や、勝田守一を中心的なリーダーとする教育科学研究会の研究運動であった。山住が、これらの研究運動に参加し、生涯にわたって深く関与していくようになった背景には、学問上の恩師ともいべき勝田守一の影響が大きかった。追悼文集『點鬼簿』には、勝田を追想する文章が5本（34ページ）掲載されており、これは遠山啓（7本・36ページ）に次ぐ分量の多さである。このことから、山住にとっての勝田の影響力の大きさがうかがえる。勝田との出会いは、山住が大学院の一年目を終える頃であり、それは勝田が学校教育学科

から教育学科へうつってきたという全くの偶然によるものであった³⁵⁾。そして、大学院生活も終りになる頃には、勝田のゼミナールに皆勤するようになり、その後は、勝田に導かれる形で、教育科学研究会や日教組の教研活動に山住も積極的に参加するようになった。そして、勝田が初めて編集した教育学の概論書である『教育学』（青木書店、1958年）に、山住も共同執筆者として名を連ね、「教育内容」の章を担当している。では、山住は、勝田から何を学び、勝田教育学をどのようにとらえ、それをどう発展的に受け継ごうとしていたのだろうか。この問題を考えていくうえで、まず最初に、勝田と山住が出会い、交流を深めていく1950年代後半における勝田の研究上の関心がどこにあり、山住の研究関心との接点はどこにあったのかを考察してみたい。

当時の勝田は、1954年2月号の『教育』誌上に発表した論文「教育の理論についての反省」で述べていたように、政治・経済等の教育をとりまく社会的な諸条件の分析に重点をおいた当時の教育学研究の傾向を批判的に吟味しながら、教育の事実・実践に密着して、実践に新たな見通しと可能性を拓くような教育理論の構築を模索していた。また、山住が強い関心をもって手がけようとしていた芸術教育や国民文化の問題については、随想的な文章³⁶⁾を書いてはいたが、自らの研究対象として本格的に深めていくことはなかった。勝田は、青年期に作家を志していたこともあるというエピソード³⁷⁾が伝えられているように、哲学そして教育学研究を生涯の仕事としつつも、文学や芸術の問題については終生強い関心を持ち続けていたと思われる。そして、そのことは、『戦後教育学』の最良の到達点³⁸⁾と評価されている、勝田教育学の基本構図を提示した著書である『能力と発達と学習』で展開されている人間の諸能力モデルの基本要素の一つとして、芸術に関する「感応・表現の能力」が重要な位置づけを与えられていることから裏付けられる。

しかし、このように芸術教育の問題に深い関心を払いつつも、1950年代後半の時期における勝田が深めようとしていた教育学上の理論的なテーマの一つは、認識と人間形成の関連をめぐる問題であった。この問題について、勝田は、「認識の発達について」（『教育』1957年8月号）、「能力としての論理的思考について」（『現代学力体系1』1958年、明治図書）、「認識の質と子どもの生活現実」（『教育』1959年12月増刊号）、「認識の発達と教科の系統」（『教育』1960年12月増刊号）などの論稿において、教育実践に即しながら、教育と認識をめぐる問題の議論を整理して自説を展開している。また、『能力と発達と学習』をまとめ終わる1960年代半ばの時期にも、「認識の発達と感性の問題」（『教育』1964年11月号）を執筆していることから、「認識の発達と教育」というテーマは、勝田教育学の基本的な骨格を構成するものであった。これらの論稿が書かれた背景には、『認識の発達』についての研究は、教科研としても、1956年頃から本格化するにいたった教科の研究を基礎づけるものとして重視したところであった³⁹⁾と述べられているように、数学教育をはじめとする各教科の研究が進んでいく中で、それを基礎づけていく教育学上の理論課題として「子どもの認識の発達のすじみち」を明らかにすることが、勝田自身にとっても強く自覚化されてきたと考えられる。

山住が、大学院の勝田ゼミに積極的に参加していた1957年は、ちょうどこのような時期であり、「認識の発達をあつかわれた先生のゼミには皆勤し、レポートも提出した。このレポートは、あとで不満足に感じ、西ヶ原のお宅までとりもどしに行き、結局、先生の単位は一つもとらずに大学院をおわることになった」と当時を回想している⁴⁰⁾。このゼミナールでの学習は、山住にとって、人間の認識や感情の発達において芸術教育が果たす独自の役割は何か、という問題を探究する契機となり、それは、1958年に書かれた論文「芸術教育における論理的思考の形成⁴¹⁾」へとつながっている。そして、勝田の導きにより、芸術教育のみならず、自然科学、社会科学、言語文化、身体文化など、広く諸科学や文化の体系と教育をつないでいく結節点として、人間の認識や能力の発達の問題が位置付けられ、山住は、教育課程・教育内容研究を自らの中心的な研究テーマにすえて、1960年代以降、本格的な教育学研究者としての歩みを進めていくことになった。

1950年代後半の勝田は、日教組の全国教育研究集会、教育科学研究会など、教育実践の研究と運動に深く関与しながら、実践を推進し、その質を高めていくことに力を与える教育学の確立を模索していた。後に『人間の科学としての教育学』（著作集第6巻）に結実していくような教育学の構想が、勝田の中ではだいに発酵しつつあった。そして、大学院修了以後の勝田と山住の関わりは、「もう東京大学教育学部ではない場所での先生との接触であった」と山住自身が述べているように⁴²⁾、教科研や日教組の教研活動をはじめとする教育実践研究の現場であり、また、岩波講座『現代教育学』、『家庭の教育』（全4巻・岩波書店）の刊行等のとりくみであった。こうした関わりを通して、山住は、勝田からどのような影響を受けたのだろうか。勝田著作集第3巻『教育研究運動と教師』の編集・解説は、山住が担当しており、ここにも山住の勝田に対するとらえかたの特徴がうかがえる。「解説」の文章の冒頭には、『岩波小辞典・教育』（勝田守一編、1956年）に掲載されている勝田自身が執筆した項目である「新島襄」についての文章が引用され、教育者としての新島襄と勝田の姿を重ねるかたちで、次のように述べられている。

勝田自身、ほかならぬ教師であり、ひとりの教師であることに、誇りと自覚をもっていた。それは、新島襄の精神に通ずる。もちろん、新島そのものたらんとつとめたのではあるまい。しかし、新島と同様、独立自由の精神と気魄をもち、しかも武士的風格やキリスト教信仰とは別のなにかを、現代において模索し、同時に教師にも、その精神や気魄、さらには新しい風格の形成を期待したのだろう。

山住が、勝田の中に見てとった「一人の教師であることの誇りと自覚」は、30数年に及ぶ大学教師としての生活のなかで、山住自身がまさに追究し深めてきたものであった⁴³⁾。そして、「近代日本にあって、在野精神を全身に充満させた私学人であり、宗教者の典型であった」⁴⁴⁾と評される新島と、民間教育研究運動の発展に生涯をささげた勝田に共通する「独立自由の精神と気魄」は、山住にも受け継がれ、それは、「山住教育学」の性格を根本

的に規定するものであったと考えられる。

——おわりに——「文化と教育をつなぐ」という教育理念

山住は、東京都立大学人文学部の最終講義「文化と教育をつなぐ」のなかで、自らの教育学研究の足跡をふりかえって次のように述べている⁴⁵⁾。

私の教育学研究は音楽教育、とくに小学校における唱歌教育の成立過程を明らかにするところから始め、やがて日本の子どもの歌の歴史を追いかけていったのですが、そのなかで日本の音楽には大衆音楽、芸術音楽、そして教育音楽と、三つの音楽文化があるという、ちょっと考えてみれば当たり前のことに気がついたのです。

山住が発見した、音楽文化の領域における性格の異なった三つの文化の併存という問題は、歴史や数学など他の文化領域にも認められることであり、「三つの文化は日本のあらゆる領域において存在するのではないかと思えてなりません」と、山住は述べている⁴⁶⁾。また、こうした近代日本の文化のありかたにみられる問題が、教育内容や教育方法に深刻な歪みをもたらし、本物の文化・芸術から教育を遠ざけていく要因となったことを指摘している。そして、作曲家・滝廉太郎、東洋史家・桑原隲藏、数学者・小倉金之助等の業績を「本物の文化と教育をつなぐ仕事であった」と高く評価している。梅原利夫が指摘しているように、山住の「学問研究を支える日常の生活スタイル」には、「生活の主要部分」をなしている旺盛な読書や、多くの分野の知識人・文化人との交流があった。山住がこうした生活スタイルを生涯にわたって貫き、あらゆるものから貪欲に学ぶ姿勢を大切にした根底には、近代日本の教育と文化の関係を紡ぎ直し、「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造をめざす教育」（1947年教育基本法の前文）を実現したいという理念が存在していた。

このような教育理念は、本稿で述べてきたように、1950年代後半～60年代初頭の時期までの、山住の経験と思索、そして様々な文化領域における魅力的な人物との出会いを通じて培われてきたものであった。そして、それは、「戦後教育学」を特徴づける重要な理念の一つでもあったといえよう。この理念を土台にして、1960年代以降の急速に変貌する日本社会と教育現場のなかで、山住は、民間教育研究運動の第一線に立ちながら、膨大な論文と文章の執筆、社会的な発言と行動、そして大学教師としての教育実践を通じて、「未完のプロジェクト」ともいえる教育改革の推進に力を尽くすことになったのである。

〈注〉

- 1) 中野光「趣旨説明：1950年代と教育研究」、『教育学研究』第63巻第1号、1996年3月
- 2) 斎藤浩志「戦後教育学の原点をどうとらえるか」、『教育学研究』第61巻第1号、1994年3月
- 3) 柿沼肇「討論のまとめ」、『教育学研究』第63巻第1号、1996年3月
- 4) 佐藤学「教育学の反省と課題」（『岩波講座・現代の教育1』、岩波書店、1998年）、今井康雄『メディ

- アの教育学』(東京大学出版会、2004年)、広田照幸『<愛国心>のゆくえ』(世織書房、2005年)など。
- 5) たとえば、堀尾輝久「私の仕事―戦後教育学の総括とかかわって―」、『東京大学大学院教育学研究科・教育学教室 研究室紀要』第32号、2006年6月
 - 6) たとえば、黒崎崎『教育学としての教育行政=制度研究』(同時代社、2009年)
 - 7) 『教育』2003年4月号(国土社)には、田中孝彦、北田耕也等5人の教育学研究者による追悼文が掲載されている。また、同誌2003年12月号では、<教科研運動のなかで山住正己をどう評価するか>という小特集が生まれ、佐藤広美、梅原利夫、山田康彦が、それぞれの専門とする、日本教育史、教育課程論、芸術教育論の視点から、山住の研究業績についての検討が行われている。
 - 8) 中江和恵「教育学者山住正己における近世研究」(『和光大学現代人間学部紀要』第2号、2009年)。梅原利夫「山住教育論における文化と教育」(山住正己編『文化と教育をつなぐ』国土社、1994年)
 - 9) 奥中康人『国家と音楽―伊澤修二がめざした日本近代』(春秋社、2008)、渡辺裕『歌う国民―唱歌、校歌、うたごえ』(中公新書、2010年)など。
 - 10) 山住正己編『文化と教育をつなぐ』国土社、1994年
 - 11) 山住正己『「聞き書き 井上頼豊 音楽・時代・ひと」を読む』(『音楽教育』1996年4月号、音楽教育の会編)。山住「いずかたよりいずかたへ―柴田南雄『わが音楽わが人生』」(『文学』1996年4月)
 - 12) 山住正己「元ライオンのカバ先生―梁田貞」(未来社編集部編『十代にどんな教師に出合ったか』未来社、1985年)
 - 13) 山住『教育とは何かを求めて』草土文化、1976年。また、父親の思い出については山住『點鬼簿』に所収されている、父親への追悼の文章を参照。
 - 14) 音感合唱研究会『第5回同窓会・記念文集』(2004年)に収録されている「座談会・四半世紀の音感」での、前田靖幸(1949年入会)の発言から。
 - 15) 前掲の「座談会」での議論から。また、前掲注14の『同窓会・記念文集』には、音感合唱研究会の481名の名簿が掲載されている。そのなかで、山住と同じ1954年の入会者は74名であり最も多くなっている。また、その前後の年をあわせた1953年～55年の入会者は183名であり4割近くを占めている。この点からも、1954年前後の時期が、音感の活動のピークであったことがうかがえる。
 - 16) 山住正己「サークル活動、研究、そして結婚」(『日本の科学者』1979年6月号)
 - 17) 前掲の「座談会」における柴崎光弘(1954年入会)の発言
 - 18) 前掲の「座談会」における山代研一(1957年入会)の発言
 - 19) 前掲の『記念文集』には、「アンケート―音感時代の愛唱歌」が掲載されており、山住が入会した1954年の「愛唱歌」のベスト5は、①森の歌、②赤いサラファン、③トロイカ、④美しき祖国のために、⑤カチューシャ、であった。
 - 20) 前掲注16
 - 21) 山住正己・富田博之「芸術教育(図工・音楽・演劇)―1956年度の成果と反省―」、『教育』1957年1月号
 - 22) うたごえ運動が日本の音楽文化のあり方を根本から変えていく可能性を孕んでいるというとならえかたは、当時の少なくない音楽専門家にも共有されていた。たとえば、山住と同世代の作曲家である林光は、次のように述べている。
「わずか6、7年の間にずぶの素人が発揮するこの様な創造力というものは、日本の音楽の将来に限りない光をなげかけるものであり、それ以上に、長いあいだいわれつづけてきた“国民音楽”というものの、最も素朴にして肝心な芽がここにある、ということを示しているといえよう」(林光「うたごえ運動の意義」、『音楽芸術』1955年9月号)
 - 23) 山住「音楽科教育論争」(上)(中)(下)、『現代教育科学』1964年7・8・9月号
 - 24) 東京大学農村サークル研究会の名称で、『学習の友』1956年11・12月号、1957年1・5月号に生活記録

学習と青年運動についての論稿が掲載されている。また、『教育』1957年12月号には、木下春雄との連名で、「青年の生活記録学習を検討する」が掲載されている。

- 25) 山住「農村、演劇、PTAへのいざない」、前掲『點鬼簿』
- 26) 日高六郎編『社会生活と道徳教育』（講座『道徳教育』第8巻、1956年）
- 27) 山住正己「なぜそんなに急いで逝ってしまったんだ」（山住の木下春雄への追悼文、『點鬼簿』所収）
- 28) 東大農村サークル研究会「くらしに根ざした青年運動—第三回全国青年研究集会から—」、『学習の友』（労働者教育協会編、1957年5月号）
- 29) 社会教育研究の領域では、「芸術と社会教育」というテーマについては、宮原誠一、碓井正久等の論稿があるが、本格的には1970年代以降、北田耕也、佐藤一子等により深められてきた。しかし、社会教育の全体的な研究動向においては、いまだ周辺的な位置づけにある。
- 30) 日教組の第5次全国教育研究集会のまとめである『日本の教育』第5集、1956年
- 31) 山住「教育情報・第1回芸術教育全国連合研究集会」、『教育』1957年10月号
- 32) 山住「なぜあれほど音楽教育改革に情熱を注いだのか（弔辞）」、季刊『音楽教育研究』（音楽之友社、1980年秋季号）に収録
- 33) 山住は後に、この本の刊行について「天下の岩波新書であっただけに喜びは格別であり、もう死んでも日本文化に少しは貢献したことになるなどと思ったものだ」と、その喜びがひとしおであったことを述べている。（山住正己先生退職記念文集『碑のいしぶみ』1994年）
- 34) 前掲注32
- 35) 山住「先生との偶然の出会い」、東京大学教育学専攻大学院有志編『勝田先生を偲ぶ』（東京大学教育学部教育学科、1970年）
- 36) たとえば「一つの歌声」（『教育手帖』1955年1月号）。また、「子どもの感覚」（『教育音楽』1954年7月号）では、芸術教育へとつながる子どもの感性の問題が論じられている。
- 37) 勝田守一著作集第7巻『哲学論稿・随想』（国土社、1974年）の坂元忠芳による解説
- 38) 佐藤学編『教育本44』（平凡社、2001年）における、佐藤学による解説から。
- 39) 勝田守一著作集第4巻『人間形成と教育』（国土社、1972年）の藤田昌士による解説
- 40) 前掲注35
- 41) 『教育』1958年12月増刊号
- 42) 前掲注35
- 43) 前掲注33の退職記念文集『碑のいしぶみ』（1994年）には、東京都立大学の学部・大学院の山住ゼミで学んだ学生・院生たちの文章が、ゼミにまつわる様々なエピソードとともに綴られている。これを一読すると、大学教師としての山住の姿がくっきりと浮かび上がってくる。
- 44) 同志社編『新島襄・教育宗教論集』（岩波文庫、2010年）
- 45) 前掲注10
- 46) 山住は、このような近代日本文化の問題性についての認識を、1960年代初頭の時期にすでに獲得していた。たとえば、『教育評論』1962年11月号では、「文化と教育のあいだ」という座談会（出席者は、日高六郎・木下順二・野間宏・鈴木力）が行われ、そこで山住は問題提起役を務めている。そのなかで、音楽文化の領域での3つの文化の併存をとりあげ、その問題は、歴史など他の文化領域にもみられることを論じている。